

メープルレター(99)

ドリトル先生 80歳の試練

秋が深まり、紅葉の美しい季節になりました。様々の国からの豪華客船も引きを切らずきららずに港に入り、ぼーっと哀愁のこもった汽笛を鳴らし去っていきます。

今年は地球温暖化のせいか、ローカルの林檎の収穫時期が延び、10月半ばまではとれます。その分甘味が増し、美味しいのだそうです。あちこちに林檎の販売センターもでき、スーパーでも格安のリンゴが売られています。さて、これをどう料理するか?。。。

9月は80歳を迎えたドリトル先生の試練の時期でした。80歳だからのんびりできる、そうドリトル先生は思っていたようですが、突然、ケベック州政府自動車保険公社から「80歳になりましたので、ホームドクターに運転能力確認のテストを受けてください。」との文書が届きました。高齢になると運転に支障が出ることも多いようです。

テスト1：ホームドクターの運転能力確認の簡単なテストです。1日の時間を書くようにとのことでした。ドリトル先生は、テストの時間の始まりが11時だったので、11時から1日の時間を書き始めました。ホームドクターは首を傾げ、

「普通は12時から書き始めるのよね。認識や記憶能力を更に確認する方が良いようなので専門の看護婦にあってください。」

簡単な試験だと思いあがっていたドリトル先生は思わずホームドクターの反応に落ち込みました。2週間後の看護婦との面会には安全のため、マダム田中も付き添うことにしました。

テスト2：看護婦のテスト。

「お子さんは何人ですか。お孫さんは何人ですか。名前と人数を言ってください。」

パニックになったドリトル先生は、自分の住所すら思いださないほどでした。こんなことをきかれるなんて。まして、6人の孫の名前などとっさに思いだすわけがありません。マダム田中が代わって全部こたえる羽目になりました。これは一般的な能力を試すテストだから、馬鹿バカしくても、興味がなくてもきちんと答えるように言ってはおいたのですが、それすら忘れていました。後半のテストはドリトル先生一人の二つの記憶力のテストでした。一つ目はほぼ完ぺきでしたが二つ目は半分のみでした。看護婦は、

「結果はホームドクターに送っておきます。二つめの記憶力のテストがねえ。。少し問題かもしれません。それから健康診断の血液検査を受けてください。」

ドリトル先生は、

「これは何の絵ですか、と次々三種類見せて、次は、順序を逆にしていってくださいって言うんだよ。子供でもあるまいし、馬鹿にしている。」

ドリトル先生の気持ちもわかるような気もします。その2週間後、ホームドクターに会うと、

「もう一つテストを受けてください。少し難しくなるかもしれません。ケベック州政府に連絡しておきます。そちらから詳細の連絡がいきます。」

やがて届いた3つ目のテストの連絡文書は、何より難しい路上運転能力テストの知らせでした。実際に試験管と路上を運転します。不合格の場合には運転はできなくなります。

ここで家族全員が悩んだのは、地下鉄もバスも電車にも乗らず、当節歩くことすら余りしなくなったドリトル先生から車を奪ったら、自尊心の強いドリトル先生の精神状態がどうなるかということでした。不合格というだけで落ち込むだろうし、その上一歩も家からでなくなったら、とその心配の方が大きかったのです。

義理の長男は、

「パパ、試験に合格するしかないよ。運転の試験で難しいんだ。今の運転なら、僕だって受からないと思うよ。僕が2週間トレーニングするから頑張ってみて。まず試験のポイントをネットで探して送るから、それをよく読んで。」

やがて届いた5-6ページの試験要綱。2-3日すると、

「パパ、ちゃんと読んだ？今度は更にポイントしぶったのを送るから、それをよく読んで。」

絞り込んだレジュメが送られ、ドリトル先生は朝から晩まで必死で読んでいました。記憶力が落ちている80歳にはハードだったと思います。2-3日すると、

「パパ、週末にそっちに行くから、路上テストをしてみよう。」

長男はドリトル先生の家に着くとまずはポイントの復習、そして1時間の路上テスト。

「パパ、試験場近くの教習所の先生を一人雇って、パパのトレーニングを本格的にしてもらうことにしたから。試験の前日にしたから、必ず行ってね。役に立つと思うよ。」

試験の前日、教習所の先生のハードな細かいトレーニングを受けたドリトル先生は、更に当日の朝、この先生にトレーニングをもう一度してもらうことにしました。トレーニングは試験の道筋を想定したことでした。試験の一番の問題点は、死角の確認だそうです。きちんと後ろをみて、自転車も人もいないか確認する動作をチェックされるから、首が痛くなるまで体をねじって首を回すようにということでした。そのせいでしばらく試験後は首が痛かったのですが。。。

こうして試験に臨んだドリトル先生は努力の甲斐があって無事に合格し、ルンルンで帰ってきました。これからも大手を振って運転できます。家族全員胸をなでおろした瞬間でした。ドリトル先生がこれほど集中して勉強したのは10年ぶりなのではないでしょうか。

義理の長男は、その後、東京と京都の旅にでました。この旅は奥さんからの義理の長男への46歳の誕生祝いだそうです。日本とはおよそ無縁で、興味がなさそうに見えた義理の長男が日本に旅立つとは思ってもみませんでした。

「和子、どこか良いレストランとか教えて？」

マダム田中は数か所の探訪のアドバイスはしましたが、それ以上は本人が日々発見する方が良いと思い、詳細は伝えませんでした。ゴージャスなレストランより、庶民的などこにでもあるレストランを試し、美味しいものを食べ、日々の暮らしを眺めた方がずっと意味があり、楽しいように思えました。日本は、そんな庶民の知恵のある暮らしが素晴らしいのです。今頃は東京のどこかを4歳の娘と奥さんとでうろついていることでしょう。